

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
共同プロジェクト研究  
2023年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名					
	観光学部観光学科・教授		杜 国慶					
研究課題	スマート・ツーリズムの構造とメカニズムに関する観光学的研究							
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2024年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名					
	立教大学・観光学部・教授 立教大学・観光学部・教授 常葉大学・経営学部・講師 浜松学院大学・現代コミュニケーション学部・准教授 多摩大学・グローバルスタディーズ学部・准教授 帝京大学・経済学部・准教授 和洋女子大学・国際学部・助教 長崎国際大学・人間社会学部・講師 立教大学・観光学研究科・博士前期3年 立教大学・観光学研究科・博士後期1年		杜 国慶 佐藤 大祐 澁谷 和樹 鄭 玉姫 李 崗 五艘 みどり 板垣 武尊 陳 慶光 伊藤エドワード 康 乃馨					
全研究期間	2022年度 ~ 2023年度							
研究経費※ (上段:支出金額)	2022年度		2023年度		年度		総計	
	3,005,160	円	2,780,000	円	0,000,000	円	5,785,160	円
(下段:採択金額)	3,010,000		2,780,000		0,000,000		5,790,000	

※1円単位で記入

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

スマート・ツーリズムとは、情報通信技術(ICT)を融合した新たな観光形態として注目されている。本研究は観光学の視点から、ICTの進化が観光産業全体へ急速に浸透して引き起こした変革を注目し、観光情報の個人化とリアルタイム化が観光者・観光業者・観光地3者の価値共創に与えた影響を分析することを通して、スマート・ツーリズムの構造とメカニズムを解明することを、研究目的とする。

さらに、コロナ禍で大きな打撃を受けた観光業において、スマート・ツーリズムはある程度威力を発揮し、観光業に新たな可能性を示したため、今後のWithコロナ/Postコロナ時代の観光産業において貢献できる可能性を探る。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ スマート・ツーリズム ] [ 情報通信技術 (ICT) ] [ 価値共創 ]

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

概ね計画通りに研究を進めてきた。2023 年度は計画について意見交換したうえで、各自で計画通りに研究を行った。代表者と分担者各自の研究経過と成果は以下のようにまとめる。

代表者杜は長野県や山形県などを調査し、訪日観光者の ICT 対応と情報発信を調査した。また、SNS 投稿にみる訪日中国人観光者の飲食選好の空間構造を分析した成果は、学術誌へ投稿して受理された。さらに、訪日観光者数が多い東京を事例として、SNS 投稿の言語間の異同について研究し、全国大会で発表した。

分担者佐藤は、観光者の様々なツールを駆使して情報を収集する過程、その情報をもとに判断して観光行動を成し、さらに経験した情報を発信する一連の過程に注目し、先行研究等を用いて考察した (佐藤 2023)。また、訪日中国人観光者と日本人ハワイ観光者および日本人ハワイ移住者を事例に、旅程または移住計画時における情報探索ツールを使用した意思決定プロセスについて検討した。その成果の一部は杜・佐藤・康 (2024) にまとめた。

分担者澁谷は、MaaS に着目し、事業実施地域と利用者それぞれに対する調査を行った。まず、自治体における MaaS の取り組み状況と課題認識に関する調査において、スマートモビリティチャレンジ推進協議会所属自治体および「スマートモビリティチャレンジ」採択事業に関わる 185 自治体に対して、事業への関与、実施内容、課題認識に関するアンケート調査を実施し、課題が確認できた。次いで、長崎県新上五島町における SmartGoTo への取り組み状況および組織体制の変遷について、SmartGoTo の運営体制を構築する際の組織間連携に焦点を当て、関係者に対してその変遷について聞き取り調査を行い、その枠組みと問題点を確認した。第三に、MaaS アプリに対する利用者評価分析を行い、スマートモビリティチャレンジ採択事業にて使用されたスマートフォン MaaS アプリへのクチコミを収集し、テキストマイニングによる分析を行うことで、利用者評価の特徴を明らかにした。

分担者鄭は、昨年度の韓国観光行政と観光サービスの調査に続いて、韓国ソウル市と釜山市において調査した。従来のインフォメーションセンターに加えて、観光者が多く訪れる観光スポットではデジタル案内板が設置されており、タッチパネル式のもので経路検索や観光地の説明などをリアルタイムで確認できる。外国人観光者には対面で受けられる観光サービスも存在する。そして、訪日韓国人の観光行動について、東京の渋谷、原宿、浅草、上野駅を事例地域として調査を実施し、インタビュー調査を行った。訪日韓国人観光者はスマートフォンで翻訳 APP を使用するため、言葉の壁はあまり感じていないものの、レストランなどの観光関連施設ではコミュニケーションが困難であることが分かった。買い物などの決済に対しては、20 代は現金を、40 代、50 代ではクレジットカードを使用する傾向が見られた。

分担者李は、WeChat をはじめ、中国人旅行者が旅行する際に利用するソーシャルメディアに注目し、在日中国人による国内旅行の成立プロセスの解明を目的としている。まず 2022 年度には、研究の方法論的な枠組みを構築する目的で、WeChat を介した情報収集の手順と質的研究を行う際の注意点について、先行研究を踏まえて検討した。そして、宿泊施設の中国人経営者と利用客の間で行われるオン/オフラインでのインターアクションの実態を明らかにするため、宿泊施設を結節点に結成されるバーチャルコミュニティに加入し参与観察を行いながら、6 軒の宿泊施設を対象に現地調査を実施した。2023 年度には、日本調査の補助線として、中国人観光者が地域にもたらす社会的変容をテーマにカンボジアでの現地調査を実施した。

分担者五艘は、2023 年にフランス・ドルドーニュ地方における農村での調査を実施し、ルーラルツーリズム推進組織を中心としたスマート・ツーリズムのあり方を研究した。欧州 3 カ国では、コロナ・パンデミックの時期から、ツーリズムのデジタル化において EU・国・地方の財政的支援が増大し、それに伴いデジタルツール利用者も拡大した背景から、ルーラルツーリズムにおける人材育成・広報活動・販売活動においてデジタル化が著しく進み、ルーラルツーリズム推進組織の活動中心にもデジタル利用が位置付けられたことが明らかになった。一方で、日本のルーラルツーリズムは担い手を支援する推進組織は脆弱で、担い手も高齢者が多くデジタル化への対応が難しく、欧州に比較して観光活動の戻りが遅れたことから、日本のルーラルツーリズムにお

**研究【経過・成果】の概要** (つづき)

いてはスマート・ツーリズムによる変容というほどの事情は起こっていないことが分かった。研究成果は、論文投稿や学会発表で実施したほか、一般向けの講演も行った。

分担者板垣が担当したのは、カンボジア王国シアヌークビルにおけるスマート・ツーリズムである。研究成果は以下の 2 点にまとめられる。第 1 に、ICT の発展と観光空間の変容について、シアヌークビルにおける ICT の発展に伴う観光空間の変容について明らかにした。とりわけ、ロン島およびロング・サンルーム島に点在する無人のビーチにおいて、富裕層向けの観光空間が誕生したことが指摘できる。これらの ICT による影響も含め、シアヌークビルの観光空間の変容について日本観光研究学会全国大会論文集に掲載し、大会で研究成果を発表した。第 2 に、観光によるナショナリズムの生成と伝達について、シアヌークビルにおける観光資源でありイデオロギー装置となるモニュメントを事例に、観光によるナショナリズムの生成について考察した。モニュメントのロコミ分析から、観光によってイデオロギーが伝達され、ナショナリズムが生成されていることを指摘した。この成果は、和洋女子大学の紀要に掲載した。

分担者陳は大型イベントの観光情報コミュニティ形成に焦点を当て、台湾人スポーツツーリストが東京など海外のマラソン大会に参加する際に、LINE 上のコミュニティ形成および情報伝達と価値共創に演じる役割を研究している。2022 年 6 月から、台湾人スポーツツーリストが「ワールドマラソンメジャーズ」6 大会（ロンドン、ベルリン、ニューヨークシティ、シカゴ、ボストン、東京）に参加する際に利用する 6 つの LINE トークグループにおいて参与観察を継続的に実施している。The 33rd Annual Council for Australasian Tourism and Hospitality Education (CAUTHE) Conference (2023 年 2 月) で初歩的な研究成果を発表した。また、東京マラソンの現地調査 (2023 年 3 月 3 日～6 日) と LINE トークグループのメンバーを対象にしたインタビュー調査 (2023 年 4 月) の分析結果を加えて、研究成果を The 31st European Sport Management Conference (2023 年 9 月) で発表した。全体の研究結果は 2024 年度中に国際ジャーナルへ投稿する予定である。上記主な担当範囲と関連して、本共同プロジェクトの分析視点の一つである、価値共創と関連した研究成果を加筆修正し、論文は Journal of Sport & Tourism と観光マネジメント・レビューに掲載された。また、スマート・ツーリズムの応用例として、オンラインマラソンにおける参加者の行動パターンを調査・分析し、初歩的な研究成果を International Conference on Tourism Sciences (2023 年 3 月) で発表した。全体の研究結果は長崎国際大学論叢に掲載された。

分担者康は東京 23 区を対象地域とし、中国の観光支援アプリ「大衆点评」に掲載された飲食店 738 軒に関するクチコミ投稿を収集し、飲食店属性 (投稿数、消費額) に基づいて類型区分したうえで、クチコミ投稿にテキストマイニング分析を施し、訪日中国人観光者の飲食選好を観光者、メディア、飲食店、料理、観光資源の 5 つの側面との関係から解明した。成果は日本観光研究学会全国大会 (2023 年 3 月) にて発表した。現在、研究成果をまとめて学術誌に投稿する準備をしている。分担者伊藤は外国人観光者による Air B&B のクチコミ投稿について分析し、宿泊施設の立地要因を解析している。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

#### ① 雑誌論文

- 板垣武尊・李崗：クメールはできる：観光を通じたナショナリズムの生成。和洋女子大学紀要，65，2024，27-40.
- 五艘みどり：Covid-19 のもとでの栃木県の観光動向と観光情報発信。帝京大学地域活性化研究センター年報，7，2023.
- 五艘みどり ほか：ルーラルツーリズムの推進組織の持続的運営に向けた組織間連携のあり方—オーストリアでの聞き取り調査をもとに。観光研究，35(1)，2023，79-86。(査読有)
- 陳慶光：Value co-creation in sport tourism: the practices of international participants in a tourism running event. *Journal of Sport & Tourism*, 27(2), 2023, 139-159. (査読有)
- 陳慶光：An exploratory study of designing value co-creation in international sport tourism: Insights from a regional revitalizing marathon in Japan. 観光マネジメント・レビュー，4，2024，1-18。(査読有)
- 陳慶光・城前奈美：Sport tourists' behavior patterns in online sporting events: Evidence from the Tianzhong Marathon in Taiwan. 長崎国際大学論叢，24，2024，107-116.
- 鄭玉姫：観光行政による観光情報ウェブサイトの比較分析—韓国のソウル市と釜山市。濟州市を事例として，立教大学観光学部紀要，26，2024，92-101.
- 鄭玉姫・渡部いづみ：大河ドラマによる観光効果—「どうする家康」の浜松大河ドラマ館を事例として—。浜松学院大学研究論集，20，2024，171-186.
- 杜国慶：言語による観光地イメージと都市観光要素の異同—ヴェローナ市街の日本語と中国語のオンライン投稿を事例として—。立教大学観光学部紀要，24，2022，20-39.
- 杜国慶・佐藤大祐・康乃馨：東京都区部における訪日中国人観光者の空間的飲食選好構造。都市地理学，19，2024，35-47。(査読有)
- 杜国慶：SNS 投稿にみる東京都区部観光スポット分布の言語間異同。立教大学観光学部紀要，26，2024，1-18.
- 李崗・板垣武尊：中国新移民とカンボジア・シアヌークビルの社会的変容：一帯一路を背景に。多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要，16，2024，99-114.

#### ③ シンポジウム・公開講演会等の開催

- 五艘みどり：イタリアにおける長期滞在観光を可能にする食の仕掛け—南チロル県の事例から—。ロングステイ観光学会第3回定例研究会，2023年5月19日，オンライン。
- 杜国慶：スマート・ツーリズムにみる観光の変容。鹿児島商工会議所観光振興・交流推進委員会「研修会」，2024年2月29日。

#### ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- 板垣武尊・李崗：シアヌークビルにおける観光空間の棲み分け。日本観光研究学会第38回全国大会，口頭発表，2023年12月，文教大学東京あだちキャンパス。
- 康乃馨：ユーザー生成コンテンツにみる訪日中国人観光者の飲食選好。日本観光研究学会第38回全国大会，口頭発表，2023年12月，文教大学東京あだちキャンパス。
- 澁谷和樹・神谷悠 (2024)：MaaS アプリに対する利用者の評価—スマートフォンアプリへの口コミを資料とした分析—。2024年日本地理学会春季学術大会。
- 鄭玉姫：韓国のインバウンド観光の動向—観光データ分析と観光情報活用の観点から。日本経済社第10回リポートビジネス研究会，2024年3月8日。
- 陳慶光：Exploring the Role of Online Community in International Sport Tourism: Line App Usage by Taiwanese Runners in the 2022 Berlin Marathon. *The 33rd Annual Council for Australasian Tourism and Hospitality Education (CAUTHE) Conference*, 7-9 February 2023, Fremantle, Australia.
- 陳慶光：Sport Tourists' Participation Patterns in Online Sporting Events: Evidence from the Tianzhong Marathon in Taiwan. *International Conference on Tourism Sciences (ICTS2023)*, 20-21 March 2023, Kanazawa, Japan.
- 陳慶光：International Sport Tourists' Value Co-Creation through Social Media: A Mixed-Methods Netnography Approach. *The 31st European Association for Sport Management (EASM) Conference*, 12-15 September 2023, Belfast, UK.
- 梁碩・杜国慶・佐藤大祐：観光地イメージをめぐるステークホルダーの認識の異同。第38回日本観光研究学会全国大会学術論文集，2023年。
- 範鈺錦・杜国慶・佐藤大祐：観光スポットの SNS における情報の発信と拡散—東京タワーの Facebook 公式アカウントを事例として—。第38回日本観光研究学会全国大会学術論文集，2023年。